重文 旧西尾家住宅主屋ほか６棟建造物保存修理事業だより No.2

主屋屋根 修理前

はじめに

旧西尾家住宅では、令和４年度から引き続き、主屋、米蔵、納屋（米蔵北）、納屋（北東）、外塀（旧蔵納屋外壁）の保存修理工事を進めています。この「事業だより No.2」では、令和５年度に実施した工事の内容や、その過程で判明したことについて、いくつか例を挙げて紹介いたします。なお、旧西尾家の歴史や文化財の保存修理工事の進め方については、昨年度の「事業だより No.1」に記載していますので、併せてお読みいただければ幸いです。

工事の概要

事 業 主：吹田市
事業指導：文化庁文化資源活用課
　　大阪府文化財保護課
設計監理：一般財団法人建築研究協会
工事請負：株式会社中島工務店神戸支店
事業場所：大阪府吹田市内本町２丁目 15 番 11 号
工事方針：主屋　半解体修理
（Ⅰ期工事）米蔵　半解体修理
　　納屋（米蔵北）　解体修理
　　納屋（北東）　解体修理
　　外塀（旧蔵納屋外壁）　解体修理
工事期間：令和４年（2022 年）７月から
（Ⅰ期工事）令和９年（2027 年）３月まで

工事の主な内容と進捗状況

主屋：主屋の耐震補強工事では、既存の礎石の下に鉄筋コンクリート造の基礎を新設するため、あらかじめ建物を持ち上げておく必要があります。これを揚屋と言い、具体的には、建物の床下レベルに配置した鉄骨材と建物を結び付け、鉄骨材の方に荷重をかけていくことになります。今年度はその準備として、鉄骨材の配置に支障となる床組や一部の壁の解体を行うとともに、前もって土間、

束石等の解体を行いました。

また屋根は経年劣化による瓦の破損がかなり進行しており、葺き替えが必要な状態でしたので、いったん、瓦、瓦土、杉皮葺をすべて解体しました。野地板については主に破損部の解体に留め、一部は存置しました。屋根から降ろした瓦は、打音検査などにより状態を確認し、再使用可能と判断したものについては、倉庫に格納し、屋根葺き工事の時期まで保管しているところです。

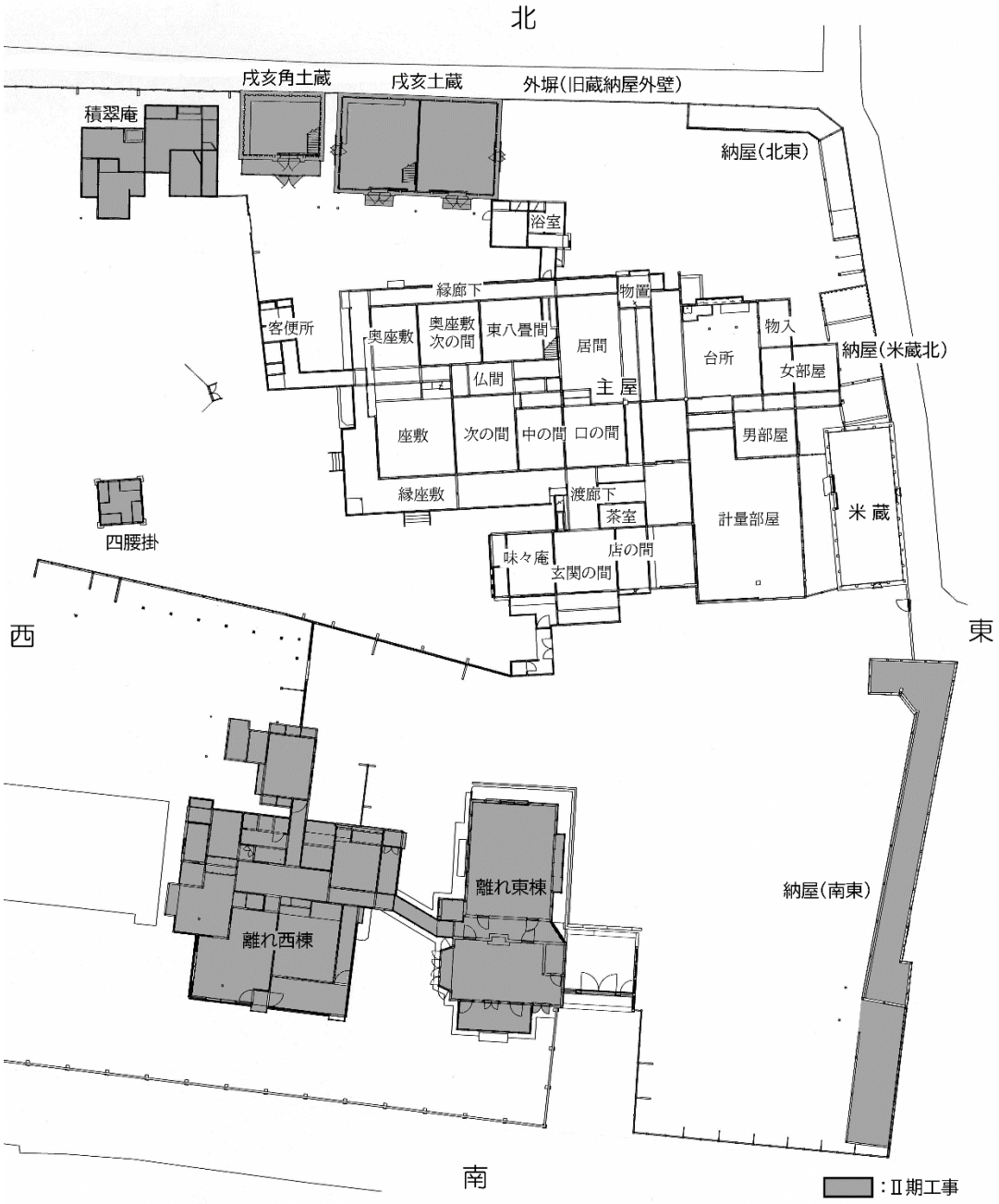
米蔵：土台、根太等の床組材、柱足元の腐朽が著しかったため、主屋の項で説明したのと同様の方法で揚屋を行い、破損部を修理しました。

また置屋根部分は劣化が進んでいたため、いったん瓦・瓦土を解体し、今年度は木部の修理まで行いました。

外壁の漆喰仕上げは破損や汚損が目立ったため、ほぼすべて解体しました（復旧はまだ先の工事になります）。

納屋（米蔵北）、納屋（北東）、外塀（旧蔵納屋外壁）：昨年の時点で解体が終了しており、今年度の工事は特にありませんでした。

その他：主屋の犬走（煉瓦敷またはモルタル仕上）については、基礎工事に支障となる部分はすべて解体を行いました

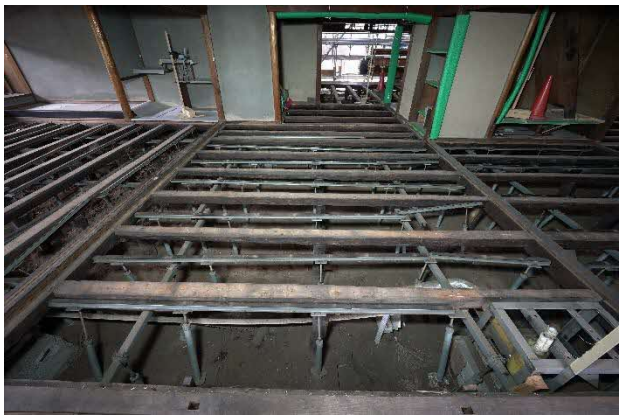


平面配置図

主　屋

01　次の間　修理前　南から見る

02　次の間　畳解体状況　南から見る　　重要文化財の保存修理工事では、順を追って丁寧に各部材を分解していきます。

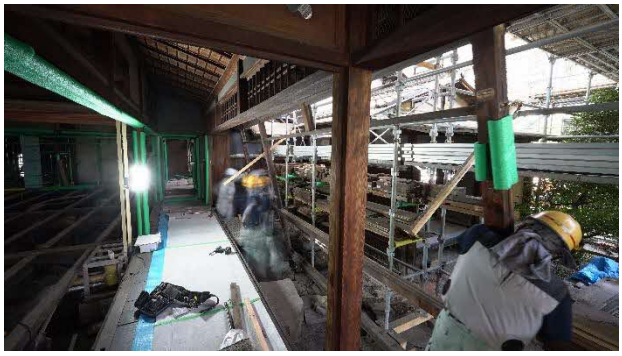


03　次の間　床板解体状況　南から見る　　さらに床板をめくったところです。一部の部屋の床組は近年、軽量鉄骨で補強されていました。

04　次の間　床組･束石解体状況　南から見る　　揚屋前の解体はここまでとなります。

05　縁座敷　修理前　東から見る

07　縁座敷　増築部分解体　東から見る



06　縁座敷　増築部分解体中　西から見る

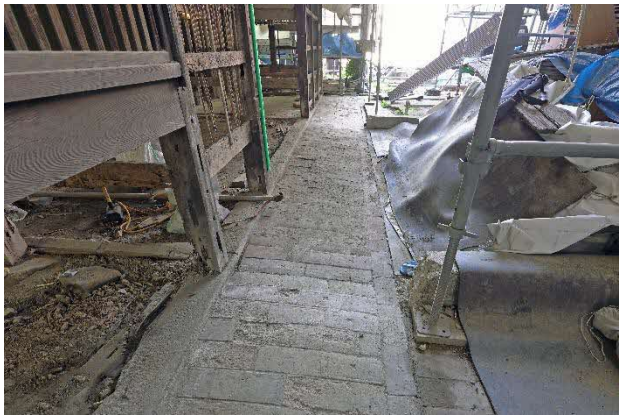
縁座敷は、現状、腰板壁のガラス窓で外部と区切り内部を畳敷にしていましたが、板壁や外側の床は増築で、かつては吹き放しの板縁で、戸締りは雨戸で行うという形式でした。

また、増築は比較的、簡易な方法で施工されており、その床下には、増築前に使用されていた、鴨川石敷の土間や踏み段がそのまま残っていました。

08 縁座敷 増築部分解体 西から見る　増築部分を解体した縁座敷を外側から見ています。かつては開放的な縁側であったことがうかがえます。

09 縁座敷 古写真 南から見る　この縁側は古写真にも写っていました。

10 修理前の鴨川石敷(左写真)と解体の状況(右写真)　縁廻りの犬走は、鴨川石という京都の石を敷きつめており、旧西尾家の意匠的な特色の一つになっていますが、耐震補強工事の支障となるため、部分的に解体を行いました。敷石を一つ一つバラバラに解体してしまうと、元のかたちに復旧するのが困難となるため、なるべく広く分割したうえで、クレーンで搬出することにしました。



11 男部屋東側犬走り 南から見る　計量部屋から台所にかけての犬走り(軒先の土間)を煉瓦敷にしていました。

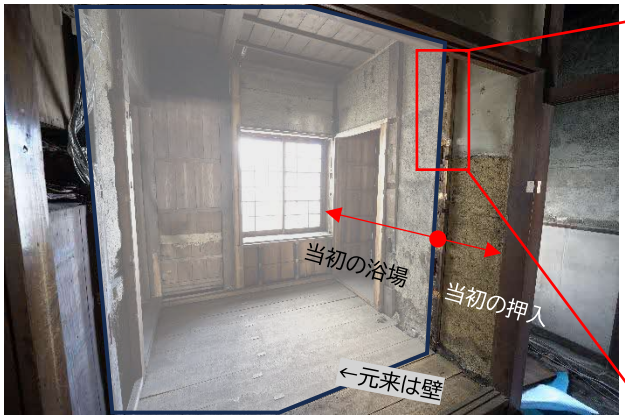
12 台所 北面外壁　土間だけでなく一部の壁にも煉瓦が使われていました。。

13 男部屋破損状況 北面　男部屋の柱足元は特に破損が著しく、今後、根継ぎ補修を行います。

14 玄関の間 試掘調査　敷地が遺跡でもあるため試掘調査を実施し、RC 基礎新設で影響を受けるような遺構がないか確認しました。

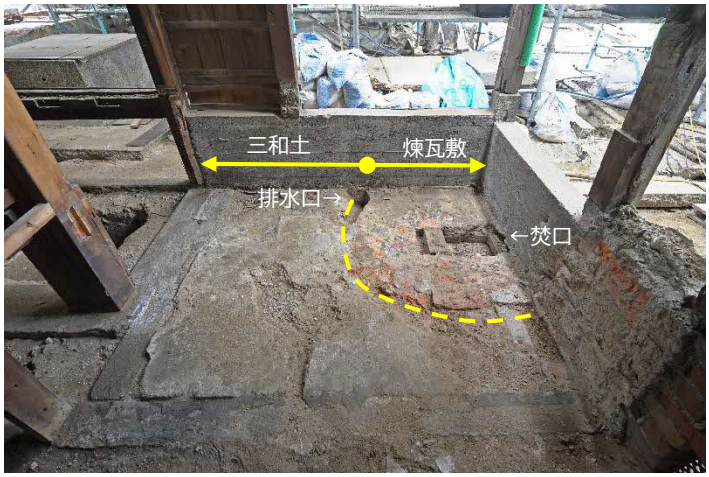
15　物置　修理前　南から見る　　修理前の物置は壁に合板が張られていました。

16　物置　古絵図該当箇所　　物置に当たる部屋は、建設当初に描かれた板絵図では、「浴場」「上り場」「押入」に区画されています。



17　物置　壁合板等解体　南から見る　　合板を解体すると、板絵図の状態と符合する痕跡が柱などに残っていました。写真で半透明に塗った部分は、痕跡から、元来、間仕切り壁だったと推定されます（写真 18 参照）。

18　物置間仕切り壁痕跡　　柱には壁の下地に使われる間渡竹を差し込むためのえつり穴や壁貫の穴が残っていました（右側に別の場所の壁下地の写真を参考として掲載します）。



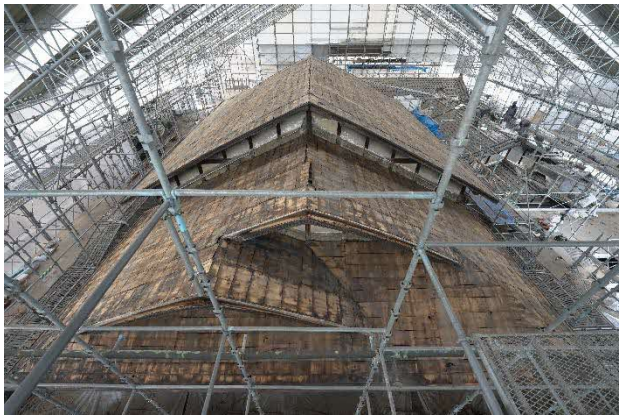
19　物置　床組およびモルタル塗り解体　南から見る

20　参考写真　明治期のものとされる風呂場　　この写真は旧西尾家のものではありませんが、参考となる類似の事例として掲載します。

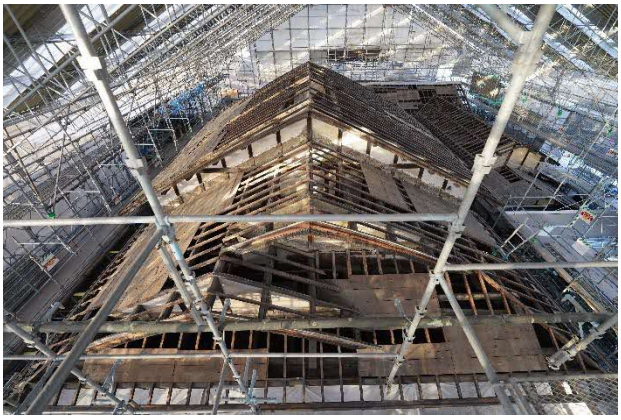
写真 19 は物置の床下を覆っていたモルタルをはつり取ったところで、煉瓦敷の土間と焚口や、排水口と見られる穴が現れました。したがって、この煉瓦の上に、参考写真 20 のような風呂釜（「長州風呂」と言います）が設置されていたことが想定されます。ただし、床下の煉瓦敷以外の部分に三和土が残っていることが、古絵図で「上り場」が板敷として表現されている点と符合しないことから、古絵図に描かれた状態と、現在の物置の状態のあいだに、煉瓦敷の上に風呂釜を設置し、風呂場全体を土間にして使用していた時期があったものと考えられます。

21　屋根　修理前　西から見る　　修理前の屋根の状態です。妻が重なった重厚な意匠は、旧西尾家の見せ場の一つです。（周囲に見えるのは、工事中の建物を保護するための覆屋で、「素屋根」といいます）

22　瓦葺仕様調査　　全面的な解体に先立ち、瓦や下地の一部を筋状に取りはずし、瓦葺の仕様を確認しました。防水層に杉皮を用いるところが、この建物の特徴と言えます。



23　屋根　杉皮まで解体　西から見る　　写真 21 の状態から、桟瓦葺、土、杉皮を解体し、野地板が見えているところです。



24　屋根　野地板解体　西から見る　　さらに野地板を一部めくったところです。なるべく材料を温存するため、解体はここまでとしました。

25　大棟仕様調査　　大棟の断面がわかるように解体し、仕様を確認しました。旧西尾家で用いられている雁振瓦は建物の規模のわりに重厚と言えます。

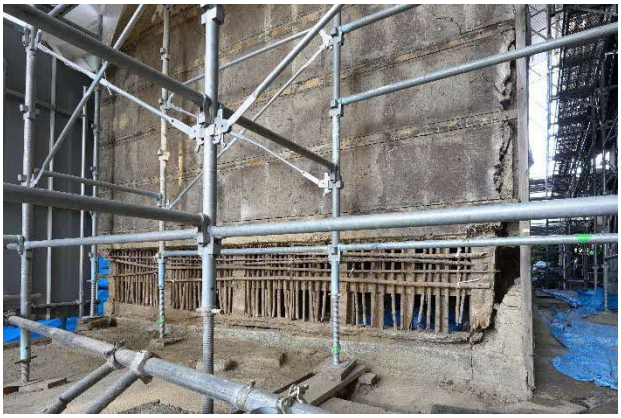
26　ナカニワ屋根　解体中　　主屋の屋根は瓦葺・銅板葺のほか、ガラス板葺の部分が一箇所だけあり、慎重に解体を行いました。

27　屋根瓦調査　桟瓦刻印　　瓦の中には製造業者を示す刻印が残っているものもありました。

見つかった刻印にはいくつか種類がありましたが、最も多かったのは、左の「泉州日根郡下箱作　中谷新治郎製」と刻まれたものでした。ここに見える「箱作」という村を含む泉南地域は、近世初めから昭和半ばまで、谷川瓦や和泉瓦と呼ばれる瓦の名産地として知られていました。旧西尾家の瓦は、刻印の商標マークから、明治期に製造されたものと推定できます。

米　蔵

28　柱・土台破損状況　米蔵の足元の木材は破損が著しく、柱の根継補修や土台の取替、地覆石の取替が必要でした。



29　土壁解体状況　揚屋の準備として、足元の壁を小舞を残して解体した状況です。

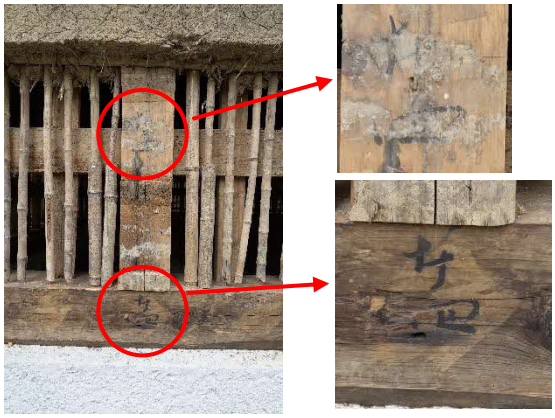
30　揚屋準備　揚屋の準備として、木材を井桁に組んだ「櫓」の上に、荷重をかけるH形鋼や木部に力を伝達するための鋼材（根がらみ材）を、建物の長手・短手の両方向に設置した状況です。

31　揚屋準備　右上の拡大写真のように、根がらみ材で木の柱を挟んで締め付けます。足元の壁を解体したのはこのためです。柱との緊結に金物は用いず、摩擦力だけで持ち上げます。

32　油圧ジャッキ作業状況　揚屋は測定機器を用いながら、一回あたり5mmずつ、慎重に繰り返していきました。

33　揚屋作業中　最終的には約30cm持ち上げて、土台、地覆石、柱脚部を修理できるようにしました。

34　柱のほぞと土台のほぞ穴　柱の根元には「ほぞ」という突起があり、土台上部の「ほぞ穴」に差し込むようになっています。揚屋した建物をおろす際に、建物の位置が少しでもずれてしまうと、元通り差し込むことができなくなるので、精度の高い作業が必要です。



35 柱･土台墨書　柱･土台から墨書が見つかりました。ともに「廿四」(二十四)と書かれており、建設時の番付が判明しました。

36 地覆石取替　基礎石積の1段目(地覆石)は竜山石というやや風化しやすい種類が使用されていたため、外部に面した側の劣化が進んでおり、一部、新材と取り替えました。

37 柱根継　足元の破損が著しかった柱に対しては、根継補修を行いました。写真の継手は金輪継と呼びます。また、この部分では、間柱の足元も根継を行っています。

38 竹小舞復旧(上写真)と土練り(下写真)　上の写真は土壁の下地となる「竹小舞」を復旧しているところです。縦横に組み合わせた竹を藁縄で緊結していきます。また、下の写真は、解体した古い壁土に水を加え、補足土と藁を混ぜ込み、復旧に使う荒壁土を作っているところです。この土をしばらく寝かせておくと、粘り気が強くひび割れにくい土になります。

39 庇の修理　米蔵の窓庇は特徴的な形状をしていますが、破損が激しく、ほぼ新材に取り替えて修理しました。

重文 旧西尾家住宅主屋ほか6棟建造物保存修理事業だより

No.2

令和 6 年（2024 年）3 月 29 日 発行

発行元　吹田市教育委員会 文化財保護課

資料作成　一般財団法人建築研究協会
旧西尾家住宅設計監理事務所